

学習指導要領の趣旨を活かした小学校5・6学年における

道徳性指標の方法論的検討

—主として集団や社会との関わりに関することについて—

崔 玉 芬*
長 島 康 雄**
久 永 哲 雄***

1. 問題

平成29年3月、小中学校の新学習指導要領が告示され、「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（以下、道徳科と称す）になり、平成30年度から小学校、平成31年度から中学校に道徳の検定教科書が導入され、道徳科が全面実施された。今回の改正は、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものとして、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図るものである（学習指導要領解説特別の教科 道徳、平成29年7月）。道徳科は道徳性を養うことがねらいとし、「道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲及び態度を諸様相とする内面的資質である」とし、道徳科の目標は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野か

ら多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることである（学習指導要領、平成29年3月）。

学校教育活動全体を通じて行う道徳教育の要である道徳科においては、「生徒が自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること」「生徒が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むこと」「生徒の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れる」などの工夫が求められている（学習指導要領解説特別の教科 道徳、平成29年7月）。「生徒が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうかという点については、例えば、道徳的価値に関わる問題に対する判断的根拠やそのときの心情を様々な観点から捉え考えようとしていることや、自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしていること、複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を広い視野から多面的・多角的に考えようとしていることを発言や感想文、質問紙の記述等から見取るという方法が考えられる」（学習指導要領解説特別の教科 道徳、平成29年7月）。

平成28年7月22日、文部科学省に設置されて

* 関東学園大学 経済学部

** 東北学院大学 文学部

*** 元関東学園大学 経済学部

いた『道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議』より出された「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）【概要】」によると、道徳科の特質を踏まえれば、評価に当たって、①数値による評価ではなく、記述式とすること、②個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること、③他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行うこと、④学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること、⑤道徳科の学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ること、等が求められている。

道徳科の主な内容として、「A主として自分自身に関すること」「B主として人との関わりに関すること」「C主として集団や社会との関わりに関すること」「D主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の4つの側面から構成されている（学習指導要領，平成29年3月）。またこれらの内容は、小学校1学年と2学年，小学校3学年と4学年，小学校5学年と6学年，中学校の発達段階に沿って詳しい内容が定められている。

学習における評価は、児童自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、指導の目標や計画，指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものである（学習指導要領解説特別の教科 道徳，平成29年7月）。教師として児童・生徒に対する個人内評価を行う場合，児童・生徒一人ひとりの変化や成長を把握しなければならぬし，その変化や成長の把握が難しい。『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）【概要】においても，評価に当たっては，児童生徒が一年間書きためた感想文をファイルしたり，1回1回の授業の中で全ての児童生徒について評価を意識して変容を見取るのは難しいため，年間35時間の授業という長い期間で見取ったりするな

どの工夫が必要と指摘している。

学習によって変容していく児童・生徒の個人の実状を把握するためには，教師は段階的に評価を継続できる座標になるものが必要だと考えられる。道徳科の評価方法としては，道徳学習ノートや感想文・作文，ワークシートなどの蓄積物から，ポートフォリオやルーブリックなどの評価があるが，これらの技法は，教育評価一般にとっては有意義なものであるが，教員の多忙化に拍車をかける恐れも大きい（藤岡，2018）。また，道徳性は人間の内面のものとして目に見えない分，安易に評価することは難しい。ゆえに教師が，学習によって変容していく児童・生徒の個人の実状を把握するためには，段階的に指導を継続できる評価指標が必要だと考えられる。新たな評価指標として，学期・学年の始めから終わりまで，授業の内容に応じて定期的かつ随時に質問紙調査を行い，得られた質問紙データを根拠として，児童・生徒一人ひとりの変化や成長を把握・評価することは有効であると考えられる。ある一定期間内での変化を捉えるのには，質問紙形式で評価することも効果的であろう。質問紙法は手軽に利用できる方法である（宮下，1998）ため，児童・生徒の道徳性を評価する一つの方法として考えられる。しかし現段階において，学習指導要領に準拠する形で検討された質問紙がまだ開発されていないのが現状である。

道徳と関連する質問紙として，道徳性検査尺度として，心理学的立場から道徳性の発達について検討するために開発された古畑（1992）の「道徳性診断検査 HEART 小学生版」および古畑（1996）の「道徳性診断検査 HEART 中学生版（S版）」があげられる。これらの尺度は，小学生と中学生の道徳性の外的行動傾向と内的形成水準を測定するためのテスト（岡・古畑・明田・橋本・清水・岡本・滝，1996）として，外的行動傾向（思いやり，自己確立，生活規範）・内的形成水準（欲求充足型，他者志向型，規範遵守型，自律愛他型の4段階）から道徳的発達を診断する尺度である。上記以外，森尾（2009）の道徳的志向性尺度，村山・三浦（2019）の日

本語版道徳基盤尺度、横塚（1989）向社会的行動尺度（中学生版）、内田・北山（2001）の思いやり尺度、藤原・村上・西村・濱口・桜井（2014）の小学生における対人的感謝尺度などがあげられる。しかし、これらの尺度は、心理学的側面から、道徳の一部分を測定する尺度であり、文部科学省の学習指導要領での道徳の項目内容に基づいて開発された質問紙ではないため、道徳科を評価する尺度としては使用が難しい。

手島・安保（2017）が開発された道徳的態度尺度は、文部科学省作成の平成 27 年度改訂版「中学校学習指導要領 第3章 道徳」における道徳科の内容をベースに質問項目を作成した尺度として、「自己の追求」「集団・社会への貢献」「ルール・マナーの遵守」「他者の尊重」「畏敬の念」の5つの下位尺度から道徳的態度を測定する尺度である。しかしこの尺度は、新学習指導要領に基づいて開発した尺度ではありながら、道徳科の内容（4つの内容）について詳しく検討していなかったため、教科としての「道徳」を評価する根拠となる尺度としては使用が難しい。

新学習指導要領に基づいて開発した尺度として、崔（2021a）の「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として自分自身に関すること—、崔（2021b）の「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として人との関わりに関すること—、崔（2021c）の「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として集団や社会との関わりに関すること—、崔・長島（2021）の「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること—がある。これらの尺度は、平成 27 年度改訂版「中学校学習指導要領 第3章 道徳」における道徳科の内容に沿った形で作成された中学生用道徳性尺度として、教科としての「道徳」を評価する根拠となる尺度としては適切である。しかし、この尺度は中学生用の尺度として、小学生には適していない。

新学習指導要領に沿った形で、小学校の各段階（1 学年と 2 学年、3 学年と 4 学年、5 学年と 6 学年）に応じた小学生用道徳性尺度はまだ

開発されていないのが現状である。しかし、道徳科の個人内評価・記述式評価の根拠となるものが必要である。そのため、小学生用道徳性尺度を開発することが必要であると考える。

2. 目的

上記のことより本研究は、小学校5学年と6学年の児童用で、学習指導要領に準拠した道徳科の評価（個人内評価・記述式評価）の根拠となる具体的な評価指標として、質問紙尺度を開発するための項目収集を行うことを目的とする。学習指導要領での道徳科の内容項目の中で、「主として自分自身に関すること」について検討できる質問紙を作成するための項目収集を行う。具体的には、中学生用「特別の教科 道徳」の中で、「主として自分自身に関すること」の尺度で取り上げた内容項目をもとに、小学校の教員による判断を依頼し、質問紙作成のための項目収集を行う。

3. 方法

調査対象：関東・東北地方の小学校教員14名

調査時期：2021年12月

調査内容：①フェースシート：教職歴、道徳教育歴、性別、年齢を求めた。②中学生用「特別の教科 道徳」で得られた「C主として集団や社会との関わりに関すること」の5側面（「遵法精神、公德心；公正、公平、社会正義；よりよい学校生活、集団生活の充実」、**「社会参画、公共の精神；郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度；国際理解、国際貢献」**、「家族愛、家庭生活の充実」、**「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度；国際理解、国際貢献」**、「社会参画、公共の精神」の内容を参考に、小学校5学年と6学年の「C主として集団や社会との関わりに関すること」の7側面（**「規則の尊重」**（法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと）、**「公正、公平、社会正義」**（誰に対しても差別をすることや偏見をもつことな

く、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること）、「勤労、公共の精神」（働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意識を理解し、公共のために役に立つことをすること）、「家族愛、家庭生活の充実」（父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをすること）、「よりよい学校生活、集団生活の充実」（先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学校や学校をつくと共に、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること）、「伝統や文化の尊重、国や郷土を愛する態度」（我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと）、「国際理解、国際貢献」（他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努めること）に関する評価項目を作成した。上記の評価項目について、小学校5年生と6年生にとって適切な表現かどうかの確認のため、以下の説明文をもって説明を行った。「道徳の内容項目を評価するのに適切であるかを判断いただき、適切ではないと判断された質問項目について、右の空欄に修正文をご記入ください。なお、不必要な評価項目については当該数字に×を付けてください。また、その他の付け加えるべき評価指標にお気づきの場合、下の線にご記入ください」。

4. 結果

小学校5学年と6学年で道徳教育を担当している教員14名を対象に、適性調査を行った。対象者の平均年齢は44.1歳、平均教員歴は16.8年、平均道徳教育歴は15.7年、男性6名女性8名であった。

崔（2021c）の「C 主として集団や社会との関わりに関すること」の中学生用道徳性評価項目5側面の内容をもとに、学習指導要領の小学校5学年と6学年の「主として集団や社会との関わりに関すること」の7側面の内容に合わせて、評価項目を修正した。調査にご協力いただいた教員には、それぞれ評価項目の内容が小学

校5学年と6学年の児童が使用するにあたって適切であるかについて判断していただいた。評価項目の内容や表現が小学校5学年と6学年の児童にふさわしくないと判断した項目、表現が適切ではないと判断した項目、内容が重複している項目について修正をいただいた。一つひとつの評価項目に対する14人の指摘を、KJ法による分類によって評価項目を修正した。また一人でも適切な指摘だと判断した場合、その指摘に沿って評価項目を修正した。その結果、「規則の尊重」を評価する項目として4項目（表1）、「公正、公平、社会正義」を評価する項目として5項目（表2）、「勤労、公共の精神」を評価する項目として7項目（表3）、「家族愛、家庭生活の充実」を評価する項目として7項目（表4）、「よりよい学校生活、集団生活の充実」を評価する項目として7項目（表5）、「伝統や文化の尊重、国や郷土を愛する態度」を評価する項目として6項目（表6）、「国際理解、国際貢献」を評価する項目として5項目（表7）の計41項目が、小学校5学年と6学年の「主として集団や社会との関わりに関すること」の評価項目として得られた。

Table1 「規則の尊重」の評価項目

規則の尊重
① みんなで話し合って決めたことは必ず守る
② 社会や学校でのルールやマナーを守る
③ 公共の場では人に迷惑を掛けることはしない
④ 他人の権利を尊重し、自分の権利を守る

Table2 「公正、公平、社会正義」の評価項目

公正、公平、社会正義
① 国など関係なく、誰とでも差別なく平等に関わる
② 仲の良い・悪いに関係なく、人の意見に耳を傾ける
③ 友達の悪いところは悪いと判断できる
④ 誰とでも公平に接する
⑤ いじめを絶対にしない、させない、許さない心をもっている

Table3 「勤労、公共の精神」の評価項目

勤労、公共の精神
① 社会のために働くことを通して、自分も成長できると思う
② 働いている人を尊敬し、将来自分もそのように働きたい
③ 自分の好きなことや技術を、将来の仕事に生かしたい
④ 社会の一員として働くことで、社会の役に立ちたい
⑤ みんなで使う物を大事にしている
⑥ 求められた役割は責任をもって行っている
⑦ 働くことは人々のために役立つことだと思う

Table4 「家族愛、家庭生活の充実」の評価項目

家族愛、家庭生活充実
① 私は自分の家族を愛して、また家族に愛されている
② 家族で会話をするなど、一緒にいる時間を大切にしている
③ 家族の一員として、家事のお手伝いをしている
④ 家族は自分にとってかけがえのない存在だと思っている
⑤ 家族はいつも自分を支えてくれていると思っている
⑥ 自分は家族の一員であることに幸せを感じている
⑦ 親を尊敬していて、自分は親孝行したい

Table5 「よりよい学校生活、集団生活の充実」
の評価項目

よりよい学校生活、集団生活の充実
① 責任をもって、委員会や係の仕事に取り組んでいる
② 学級や学校の一員として、行事や活動に積極的に取り組んでいる
③ クラスのみんなが仲のいい集団づくりに向けて頑張っている
④ 学校の伝統や行事などをよく理解し、より良い学級づくりを心掛けている
⑤ 互いの良さを認め合う学級づくりを心掛けている
⑥ 先生を尊敬し、クラスみんなが尊重し合う
⑦ 児童と先生で力を合わせ、より良い学校づくりに向けて協力している

Table6 「伝統や文化の尊重、国や郷土を愛する
態度」の評価項目

伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
① 自分が生まれ育った地元が好きだ
② 地域の一員としての自覚をもち、行事に積極的に参加している
③ 地元の歴史や文化を知り、将来地元の発展のためになることをしたい
④ 伝統と文化を大切にしてきた先人たちの素晴らしさを学ぶ
⑤ 日本(自国)の良さを理解し、誇りに思う
⑥ 日本(自国)人が世界で活躍していると嬉しい

Table7 「国際理解、国際貢献」の評価項目

国際理解、国際貢献
① 世界のみんなが仲良く生活することが大切だと思う
② 世界の人々が尊重し合うことが大切だと思う
③ 世界にはいろんな人がいて、理解し合うことの大切だと思う
④ 世界でどんなことが起きるか興味がある
⑤ 世界の人々が力を合せば、世界は素晴らしくなると思う

5. 考察

今回の研究は、新学習指導要領が告示され、道徳科が全面実施されたことにより、小学校5学年と6学年の児童用の、学習指導要領に準拠した道徳科の評価(個人内評価・記述式評価)の根拠となる具体的な評価指標として、質問紙尺度を開発するための項目収集を行うことが目的であった。学習指導要領での道徳科の内容項目の中で、「主として集団や社会との関わりに関すること」について検討できる質問紙を作成するための項目収集を行い、学習指導要領に沿った形で「主として集団や社会との関わりに関すること」の「道徳性評価指標」を提案することが研究のねらいであった。学習指導要領の内容に沿った形で作成された中学生用道徳性評価項目の中で、「主として集団や社会との関わりに関すること」の5側面の内容をもとに、小学校5学年と6学年の「主として集団や社会との関わりに関すること」の7側面の内容に合わせて、評価項目の修正を行った。その結果、小学校5学年と6学年用として、「C.主として集団や社会との関わりに関すること」の7側面において、41個の評価項目が得られた。

「規則の尊重」において、提示した5項目に対して4項目が得られた。「国・社会の安全のために、法律・条令などは必ず守る」の項目は、小学校5・6年生には法律や条例などの表現は理解が難しい、との指摘を受けると同時に、「社会や学校でのルールやマナーを守る」の項目と重複している、との指摘を受けたため、この評価項目を削除した。また、「法にしたがい他人の権利を尊重し、自分の権利は正しく主張する」の項目においては、小学校5・6年生にとって、

「法にしたがい」の表現は難しい、との指摘を受けたため、「法にしたがい」の表現を削除し、「他人の権利を尊重し、自分の権利を守る」とした。よって「規則の尊重」の評価項目が、児童に解りやすい表現として4項目となった。小学校5・6年生の場合、「法律」「条例」などの表現より、「自分や他者の権利」「決まり」「ルール」「マナー」などとして理解していることが適切であることより、「規則の尊重」の評価項目が、児童に解りやすい表現となったと考える。

「公正、公平、社会正義」において、提示した6項目に対して5項目が得られた。「社会全体のことを考え、社会の一員としての自覚をもって行動する」の項目は、内容の具体性が足りないため、小学生には理解が難しいとの指摘を受け、この項目を削除した。また、「感情に左右されず誰とでも公平に接する」の項目は、「感情に左右されず」の表現は必要なく、「誰とでも公平に接する」として、表現を簡潔化した。そして、「相手がどのような立場であっても、悪いところは悪いと判断できる」の「相手がどのような立場であっても」の表現が内容の具体性が足りないため、小学生には理解が難しいとの指摘を受け、「友達の悪いところは悪いと判断できる」と修正した。小学校5・6年生の場合、抽象的な内容についての理解が難しいため、項目表現においては内容の具体性を心掛ける必要があることより、「公正、公平、社会正義」の評価項目が、児童に解りやすい表現となったと考える。

「勤労、公共の精神」において、提示した7項目に対して同じく7項目の質問項目が得られた。「責任感をもってみんなのために働く」や「責任をもって働くことで、自分の夢をもつことができる」は、小学生にとって非常に理解が難しいとの指摘を受けて、「みんなが使うものを大事にしている」や「求められた役割は責任をもって行っている」など、小学生がイメージしやすい「勤労、公共の精神」に関する表現にした。また、「社会に貢献する」は、小学生に理解が難しい表現であるとの指摘を受け、「社

会の役に立ちたい」と表現を修正した。そして、「社会の一員として働くことで、社会に貢献できる」と「働くことを通して社会貢献につながる」は、内容が重複するとの指摘を受け、「社会の一員として働くことで、社会の役に立ちたい」と、内容を一つにまとめた。また、「働く親の姿」からは、「親の姿だけではなく、キャリア教育で地域の人々のもとで職場体験もある」とのアドバイスをいただき、「働くことは人々のために役立つことだと思う」との表現と修正した。小学校5・6年生の場合、働くことに対する考えは、人のために役立つことや、自分の成長と将来と結びつくことが考えられる。よって、「勤労、公共の精神」の評価項目が、児童に解りやすい表現となったと考える。

「家族愛、家庭生活の充実」において、提示した7項目に対して同じく7項目が得られた。「家族のために働いている親を心から尊敬している」は、「勤労、公共の精神」の内容に当たるとの指摘を受けたため、「親を尊敬していて、自分は親孝行したい」と表現を修正した。また、「家族に日々感謝の気持ちを表すことができる」の表現は、「感謝」の内容に当たるとの指摘を受けたため、「私は自分の家族を愛して、また家族に愛されている」と表現を修正した。「家族に対しても、毎日欠かさず挨拶をする」の表現は、「礼儀」の内容に当たるとの指摘を受けたため、「家族は自分にとってかけがえのない存在だと思っている」と表現を修正した。小学校5・6年生の場合、家族愛は、家族を愛し家族に愛され、親のお手伝いや親孝行を行うこととしてとらえている。よって「家族愛、家庭生活の充実」の評価項目が、児童に解りやすい表現となったと考える。

「よりよい学校生活、集団生活の充実」において、提示した6項目に対して7項目の質問項目が得られた。「先生を尊敬し、クラスみんなが仲のいい学級づくりに向けて頑張っている」は、内容が複雑で、児童が理解するのが難しいため、2つの内容に分けて設問した方が良いとの指摘を受けたため、「クラスみんなが仲のいい集団づくりに向けて頑張っている」と「先生

を尊敬し、クラスみんなが尊重し合う」の二つの表現に分けた。また、「校風」や「諸活動」などの表現は、小学校5・6年生にとって理解しづらい表現であるとの指摘を受け、「学校の伝統」など、子どもが理解しやすい表現にした。よって「よりよい学校生活、集団生活の充実」の評価項目が、児童に解りやすい表現となったと考える。

「伝統や文化の尊重、国や郷土を愛する態度」において、提示した9項目に対して6項目の質問項目が得られた。「将来地元で働き、故郷の発展のためになることをしたい」と「故郷の歴史、伝統、文化を深く知り、郷土の発展に貢献したい」は、内容が重複するとの指摘を受けたため、「地元の歴史や文化を知り、将来地元の発展のためになることをしたい」と、内容を一つにまとめた。また、「故郷」などの表現は、小学校5・6年生にとって理解しづらい表現であるとの指摘を受け、「地元」と表現を修正した。そして、「地元の良さを知り、得た情報や知識を外部へ発信する」の項目について、「発信まで求めなくても良いのでは」との指摘を受け、この項目を削除した。小学校5・6年生の場合、「故郷」より「地元」と理解している。よって「伝統や文化の尊重、国や郷土を愛する態度」の評価項目が、児童に解りやすい表現となったと考える。

「国際理解、国際貢献」において、提示した5項目に対して同じ数の5項目の質問項目が得られた。「世界の抱えている問題を考え、みんなが平和で仲良く生活することを願っている」「世界の人々はみんな同じ人間で、尊重し合うことを願っている」「他国や民族の文化、歴史などを知り、理解し合うことの大切さを知っている」は、小学校5・6年生にとって理解しづらい表現であるとの指摘を受けたため、それぞれ「世界のみみんなが仲良く生活することが大切だと思う」「世界の人々が尊重し合うことが大切だと思う」「世界にはいろんな人がいて、理解し合うことの大切だと思う」と項目の表現を簡潔化した。また、「人類の発展に貢献したい」「世界の情勢や動き」などの表現は、小学校5・6年生にと

って難しい表現であるとの指摘を受けたため、「世界の人々が力を合せば」「世界でどんなことが起きるか」などと、表現を修正した。よって「国際理解、国際貢献」の評価項目が、児童に解りやすい表現となったと考える。

今回の調査は、中学生用道徳性尺度で得られた評価項目を、小学校で道徳教育を担当している教員を対象に行った適性調査であった。表現が適切ではないと判断した項目や、内容が重複している項目について指摘されたのと同時に、判断基準が曖昧な表現についても指摘をいただいた。また、小学校5・6年生にとって理解が難しい表現、または不適切な表現であるとの指摘を受けて、児童に解りやすい表現と修正した。さらに働くことについて、「親の姿だけではなく、キャリア教育で地域の人々のもので職場体験もある」とのアドバイスなどのアドバイスもいただき、項目修正を行った。普段、児童との関わりをもっている教員の鋭い観察力、広い視野などが伺える。小学校教員の添削、アドバイスをもとに、児童にとって理解しやすい表現、より充実した内容の評価項目が得られたことと考えられる。

前述のように、学習における評価は、児童自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものである（学習指導要領解説特別の教科道徳、平成29年7月）。今回の調査で得られた評価項目は、児童自らの成長を測定できるように、道徳性指標を検討する材料を提供できたと考える。

上記のことを通して、「C主として集団や社会との関わりに関すること」について、新学習指導要領に沿った形で、小学校5学年と6学年の道徳科を評価する根拠の一つとしての尺度開発のための項目収集ができたと考えられる。

6. 今後の課題

①今後、得られた評価項目をもとに、小学校5学年と6学年用「特別の教科 道徳」の尺度を

作成する必要があると考える。児童自身に対する質問紙調査を行い、さらに信頼性・妥当性の確認ができた尺度開発を行う必要があると考える。

②評価には主観的評価と客観的な評価がある。今回の研究は、児童が自分自身について主観的に評価するための指標作りであった。客観的な評価を行うためには、同様の内容と方法で、教員の立場から学習指導要領での道徳の内容項目について明らかにする必要があると考える。

7. 引用参考文献

- 崔玉芬(2021a).「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として自分自身に関することについて— 日本教育心理学会第63回総会発表論文集, 496.
- 崔玉芬(2021b).「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として人との関わりに関することについて— 日本心理学会第85回総会.
- 崔玉芬(2021c).「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として集団や社会との関わりに関することについて— 日本学校心理学会第23回福岡大会
- 崔玉芬・長島康雄(2021). 「特別の教科 道徳」の評価指標開発—主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関することについて— 日本義務教育第5回大会
- 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議 (平成28年7月). 「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告)【概要】
- 古畑和孝(編)(1992).道徳性診断検査HEART 小学生版 東京心理
- 古畑和孝(編)(1996).道徳性診断検査HEART 中学生版(S版) 東京心理
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・桜井茂男(2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, 62, 187-196.
- 宮下一博(1998).質問紙法による人間理解 鎌原雅彦・宮下一博・大野木祐明・中澤潤(編著) 心理学マニュアル質問紙法(p.7) 北大
- 路書房
- 文部科学省(平成29年3月).小学校学習指導要領(平成29年告示)
- 文部科学省(平成29年3月).中学校学習指導要領(平成29年告示)
- 文部科学省(平成29年7月).小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説「特別の教科 道徳編」
- 文部科学省(平成29年7月). 中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説「特別の教科 道徳編」
- 森尾博昭(2009). 道徳的志向性の測定の試み 日本心理学会大会発表論集, 73, 234.
- 村山綾・三浦麻子(2019).日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証—イデオロギーとの関係を通して— 心理学研究, 90(2), 156-166
- 岡隆・古畑和孝・明田芳久・橋本康男・清水保徳・岡本浩一・滝間一嘉(1996). 道徳性の発達に関する心理学的基礎(第9報告) 日本教育心理学会総会, 38, 332.
- 手島啓文・安保英勇(2017). 道徳的態度尺度の開発と信頼性・妥当性の検討 北海道心理学研究, 39, 30.
- 内田由紀子・北山忍(2001).思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究, 72(4), 275-282.
- 横塚怜子(1989).向社会的行動尺度(中学生版)作成の試み 教育心理学研究, 37(2), 158-162.

**A Methodological Study of Moral Indicators in Curriculum Guidelines Applied for
Fifth and Sixth Grades of Elementary School:
Mainly about Student Groups and Social Relationships**

Yufen CUI
Yasuo NAGASHIMA
Tetsuo HISANAGA

The purpose of this study was to collect useful survey items and develop a methodological approach for creating morality indicators in the elementary school curriculum guidelines. This study especially applied for the fifth and sixth grades morality course which mainly teach students about social groups and relationships within community. In order to investigate whether the collected survey items are appropriate for fifth and sixth graders, a questionnaire was conducted in which 14 elementary school teachers who teach the morality course were asked whether the items were appropriate for their students' developmental level. As a result, 41 items from 7 different aspects were extracted as appropriate categories. In conclusion, morality indicators in the curriculum guidelines for fifth and sixth graders to measure their learning about social groups and relationships within community were methodologically collected and found to be valid.